

「声掛けと見守り」

棚橋 智子

介護のケアプランや毎日の現場では、利用者お一人お一人の動向をよく観察して記録に残す支援経過というお仕事があります。その中で、「安心感を与える声掛け」、「動作前の声掛け」、「声掛けにてトイレへ」、「声掛けにてリビングへ誘導する」と～何度も記録します。そして、一つ一つの動作を「見守りにて」、または「介助にて行われる」と記録します。時間がなく、こちらの都合でつい全部の介助をしてしまいがちですが、声掛けによって自立を支援し、残存機能を活かすことができ、「自分でボタン一つでもかける事が出来たんだ」と共に喜び合う事が出来た時、これが介護の魅力なのだ実感しています。日々現場では、今まで出来ていた事が出来なくなり、悔しい悔しいと自分を悲観し嘆かされていた方がみえます。自力無効ということなのでしょうが、なかなか他者にお任せする事が出来ず、自我と戦ってみえます。

介護の「より良い声掛け」とは、私が見放してしまう程の自らの存在をも包み込まれている、という感覚をお伝えすることではないかと思えます。阿弥陀如来は、どのような者でも決して見捨てない摂取不捨の教えに生きる者になるために、声を掛け続けておられる。親鸞聖人もまた、一人ひとりがその阿弥陀如来の教えに出遇っていけるよう見守っておられる。そのように考えると、介護とは、仏さまと人との関わりと一緒なのではないかと思ひ、わくわくしてまいります。そうは言っても、日々の介護では、私の思いを超えて、認知症の方に対して驚きと大変さでおろおろしてしまいますが、阿弥陀如来からの遥かなる時空の歩みに思いを馳せ、ゆったりとした時間の中での“ほとけごころ 仏心の見守り隊”と成し得てみたいものです。